
風のクロノア 2 ～世界が望んだ忘れ物～

空城誠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風のクロノア2 ～世界が望んだ忘れ物～

【Nコード】

N5807D

【作者名】

空城誠

【あらすじ】

ルーナティアの世界へと飛ばされたクロノア！そこでであった口、ポプカと一緒に世界を救う冒険へと出発する。

プロローグ

だから忘れた夢がある

思い出せない夢なのか

思い出さない夢なのか

僕が夢を忘れたのか

夢が僕を忘れたのか

それでも夢は 確かにあった

クロノアは、真つ暗な空間を、ただ下へと落ちてゆく。

クロノアの意識はない。クロノアの長い耳が、ゆらめいている。

さらに下へ落ちてゆくと、白い光の筋が三つ、孤を描くようにしてそれぞれ動いていた。

何処からか リン という、鈴のような音が聞こえてくる。

クロノアの脳裏に、声が響く。

”夢の声”が、する。

「……て……」

夢の声の主は、白い背景の中で黒く浮かび上がっている。

「……けて……助けて……」

その声は、少年の声をしていた。

「……助けて……助けて……」

クロノアは落ち続けていて、今は、三つの白い光の筋に囲まれている。光の筋は、クロノアのまわりをくるくると回っている。

ふと、クロノアの目が開いた。しかし、クロノアはまだ落ち続ける。

クロノアは、荒れた海の波間から投げ出された。そのまま落下して、海面に浮かぶ。クロノアの意識は、ない。

突如、赤い飛行機がクロノアの上を横切った。

「みつけたー！」

声がするが、誰のものは判らない。

「間違いない……“夢見る黒き旅人”だ！」

誰かの声は、飛行機に乗っている一人と一匹の影から発せられていた。一匹の方の陰が、口を開く。

「おっけおっけー」

そこで飛行機は旋回して、クロノアに近づいた！

「いただきー！」

そこで、一人の方の影が、一匹を制する。

「…待て」

犬のような鳴き声が、荒れた海に響く。一匹の影は、海岸沿いにいる犬のようなものと女の子を見た。

「あーん、何アレ？」

「巫女か…ちがうな…」

「ジャマっけー。やっちゃおっか？」

「…いや、リングを落とされるとやっかいだ。まあいい。少し様子を見るぞ」

そう言つと、飛行機はその場から離れ、どこかへと去っていった。

「う、ううーん。……」

海岸に打ち上げられたクロノアは、うめき声を上げて目を開けた。すると、そこには心配そうに自分の顔を覗きこんでいる、女の子と犬のようなものが居た。クロノアは上半身を起こす。そして軽く頭を振った。

「あ、あの…大丈夫ですか……」

「え？ ああ……うん、なんとか平気みたい」

「よかった。私はロロ。巫女…巫女見習いの、ロロっでいいです」
自分のことをロロと名乗ったのは女の子の方だ。そして、傍にいる犬のようなものの方を見る。

「このコはポプカ」

ロロに紹介されたポプカは、片腕を上げて言った。

「うっす！」

「そっか、君が助けてくれたんだ…。ありがとう。僕はクロノア」

クロノアは、助けてもらったことへの感謝と、自己紹介を言う。

「クロノア……」

クロノアの名前を、ロロが復唱した。

「クロノア様とおっしゃるんですか、“夢見る黒き旅人”様のお名前」

クロノアは、ロロの言葉に戸惑った。

「え……。ちょっと待ってよ。僕は……」

クロノアの言葉を遮って、ポプカが急に吠えた。何か水から跳ねた音がする。

「ウアン!!」

上を見上げると、そこにはサメの様な幻獣が居た!!

クロノアは咄嗟に飛び上がり、幻獣の攻撃を避ける。ロロはうつ伏せに倒れて、なんとか攻撃を逃れていた。

ポプカが、去っていった幻獣に向かって舌を打つ。

「ちっ。こんなトコまで幻獣が出やがってら!!」

「と、とにかくっ、詳しくは後程お話しします。クロノア様! お力を貸して下さい!!」

ロロは起き上がり、切羽詰った表情で言った。

「え…、力って……?」

クロノアの頭の上にクエスチオンマークが浮かぶ。

「ロロ!!」

ポプカはロロを見上げて、ロロはそれに頷いた。

ロロは目を閉じ、浮かび上がる。するとロロの体を青色の光が包み、光の球体となる。それがクロノアの持っているリングについているエメラルドの宝石の中に、入り込んだ。

クロノアは、驚いてリングを見た。

「オツケ。とにかく冒険開始っ!!」

ポプカはそう言い、道を指し示した。

「え？ は?? はあ??..?」

クロノアの頭の上には、さらにクエスチョンマークが浮かび上がる。

「いーからさっ。まずあそこ、あの島まで急ぐっぜ！」

ポプカが今度は、遠くに見える、光の当たった島を指差した。

「島？」

クロノアはそれを見る。

「ここは…いつたい……」

「うしっ！ 行くぜ！」

ポプカは強引にクロノアを押しした。

第1話：泪の海　く出会いく

クロノアはとりあえず走り出す。“夢の欠片”と呼ばれる欠片や、ムウという幻獣が道には沢山居た。クロノアはリングを「撃つ」と出る“風だま”で幻獣を膨らませ、それで攻撃をすることができる。

道を進むと、目の前に高い崖が見えてきた。

「おつとストップ」

「わわっ」

目の前に、急にリングから出たポップカが現れて、クロノアは急停止した。

「ポップカ？　どうしたのさ」

クロノアが訊ねると、ポップカは崖を指差した。

「そこちょっと高いけど、オマエ大丈夫？」

「え？」

クロノアは見上げる。たしかに、自分の身長の三倍程度はあった。

「あ、どうだろ…」

「頼りねエなあオイ。そだな」

ポプカは、崖の下で気持ちよさそうに寝ているムウを見る。

「そのムウひっつかまえて、ジャンプ中にもっかいジャンプしてみろよ。そうすりゃ、あんぐらいいけるんじゃないか？」

「二段ジャンプってコト…？」

クロノアは少し崖とムウを交互に見た。

「ふ、ふん。そんなの知ってるさ」

クロノアがたんかを切る。

「ほーお。じゃ、期待してるぜ大将！」

そう言って、ポプカはリングの中へ戻っていった。

クロノアは風だまを撃ってムウを膨らませると、ジャンプした後
にムウを蹴ってもう一段ジャンプ！ 見事崖を登ってみせた。

『おー、やるじゃんクロノア！』

リングから、ポプカの声が聞こえた。

「ま、まあね」

崖を登り終わると、クロノアは道に落ちていた人形の一部を拾った。

「なんだ、これ？」

クロノアが眺めていると、リングの中からロロの声がした。

『さあ。とりあえず取っついてみましょうよ』

クロノアは同意して、ポケットの中にしまった。

さらに進むと、淡い青色に照らされている洞窟の中に入った。そこには大きな珊瑚や貝がある。かかっているつり橋の上には、普通のムウと、それが大きくなったムウがいた。巨大ムウは夢の欠片を体内に取り込んでいる。

クロノアはその巨大ムウに膨らませたムウを当てて破裂させて、夢の欠片を出した。

そして洞窟の出口に辿り着いたクロノアだったが、木箱が道を塞いでいるため通れなくなっていた。ふと脇を見ると、バネに乗っかってピヨンピヨンとんでいるムウがいる。クロノアはそいつに風だまを撃って、木箱に投げた。

バキイ！

見事木箱は壊れ、クロノアは洞窟を後にした。

洞窟を出てすぐ、クロノアは立ち止まってしまった。

『どっしたのですか？』

ロロがリングの中から声をかける。

「行き止まりなんだ」

『それなら、そこにある大砲を使ったらいいんじゃないか？』

ポプカがクロノアに提案する。

「うわあ、なんか心配だなア……………」

クロノアは、不安げに大砲を見上げた。

『きつと大丈夫だって！ ほら、男なら度胸！』

「う、わかったって……………」

クロノアはしぶしぶ大砲の中に入る。するとクロノアは勢い良く打ち出され、遠くにある道に着地した。

「び、吃驚した」

『まあまあ。さてと、島も近くなってきた事だし、あともうひと踏ん張りだぜ！』

「……………」

クロノアは島を見る。遠くからでは判らなかったが、その島の中央には大きな像が建っていて、その周りを太い木が一本上へと螺旋を描くように伸びている。

『どっした？ ほら、早く！』

ポプカに急かされるまま、クロノアは道を進みだした。

崖を飛び降り、また大砲に撃たれて勢い良く島へと接近する。しかし、着地地点になりそうな場所はなかった。

「う、うわアアアア！」

クロノアは叫んで、どこか着地できないかと目を必死に凝らす。もうダメかと思った瞬間、足が何かの上に着地した。

「え？」

見ると、大きな鳥の背中に乗っていた。

「た、助かった……」

『一時はどうなることかと思いました』

ロロがクロノアに同意する。

鳥はクロノアを島の反対側にある洞窟前へと運んでくれた。そのまま飛び去る鳥を目で追うと、クロノアはそのまま洞窟の中に入る。

洞窟を通り抜けて、三度大砲に撃たれて、島の太い木の上に着地した。クロノアはその木を滑り降りる。

太い木の螺旋を滑り降りると、そこには錆びた鐘が置いてあった。

「ここらでいいのかい？」

するとポプカがリングから出てきて言った。

「うーし。クロノア、リングの力でその鐘をうってみてくれ」

クロノアは、鐘を方を向く。

「これを？ ああ、うん」

パシユツ！

クロノアが鐘を撃つと、鐘は静かな音で鳴り響いた。

『やった！ 鐘が鳴った！』

途端、ロロが歓喜の声を上げた。

そして、勢い良くリングから出てくる。

「うわっ」

クロノアはそのはずみで後ろに倒れそうになった。

「そ、その鐘が、どうかしたの？」

ロロは鐘の音に聞き入っている。きつと感激しているのだろう。なのでロロの代わりにポプカが喋りだした。

「ためしの鐘。巫女になるための試練ってヤツさ。この鐘が鳴るくらいに霊力があれば、巫女として認めてくれるってな」

「やったやった！ やったよポプカ！」

ポプカの手を取り、ジャンプするロロ。しかし長くは続かなかつた。

ドテッ！

クロノアが手を伸ばしたが、間に合わなかった。ポプカは手を引いて倒れるのは免れたが、口は思いつきり転んでしまった。

「てへへ…」

起きあがり、転んだにもかかわらず笑っている口を、クロノアは少し驚いてみた。

「よっしゃ！ バグジのところへいこうぜ！」

ポプカが二人に提案する。

「バグジ？ 誰？」

クロノアはそう訊ねる。

「ルーナティアで一番の預言者様さ！」

ポプカは嬉しそうに答えた。その声には尊敬の色が混じっていると、言っても過言ではない。

「ルーナティア…」

クロノアは、ポプカの言葉を復唱する。

「……ルーナティアか…」

どこか遠くを見ながら、クロノアはこの世界の名前を呟いた。

「ほう…そのものが“夢見る黒き旅人”か」

大きな湖の真ん中に浮かんでいる島の、大きな木の下に、バグジと名乗る預言者は腰を据えていた。

クロノア達はバグジの目の前に立っている。

「はい、バグジさま」

ロロが頷く。さらにロロは続ける。

「おっしやる通り、泪の海でお会いする事ができました」

「ウム」

バグジは相づちをうつ。

「おまえが現れるって予言したのもバグジなんだ。たいしたモンだ
る」

ポプカは嬉しそうに、クロノアに耳打ちする。

バグジは、クロノアに話しかけた。

「クロノアと言ったな…あれを見るがいい」

クロノアはそう言われて、山の上にある建物と巨大な塔を見る。
バグジは続けた。

「巨大な塔が見えるだろう。あそこには、<世界を支える鐘>と呼ばれるものがあったな、ルーナティアにある四つの国、それぞれ一つずつまつられておる」

「鐘にやどる力で、世界の調停をつかさどると言われています」

ロロが割って入った。

「だがな。ワシには見える」

クロノアは、バグジの方に視線を戻した。

「どこの国にも属さぬ闇の鐘が…<五つ目の鐘>が、この世界に生まれ出ようとしているのだ」

バグジは、クロノア達からは見えないが、目を伏せた。

「そのせいであろう、各地に異変がおきはじめた。ふしぎと気付かぬ者も多いようだ…幻獣が世にはびこり、悪気にふれた巫女たちはみな病に倒れた」

クロノアは、驚いて訊ねた。

「え、じゃあロロは？」

ロロはすこし俯いた。

「見習い…ですから…」

「夢見る黒き旅人、クロノアよ。ひとつロロに力を貸してやってくれんか」

クロノアは、バグジにそう言われ、ロロを見る。

「…え？」

ロロはちらちらとクロノア顔を窺う。

「…んー…まあ、いーか。助けてもらったお礼もあるしね」

クロノアがそう言うと、ロロはにっこりと微笑んだ。

クロノアとロロは、視線を戻す。

「ウム。それでは、まず大巫女の元に行き、巫女の証をさずかるがよい」

「巫女の証…私が…あ、あ…ありがとうございます!!」

ロロが嬉しさのあまり、バグジに頭を下げようとする。すると目の前にいたポップカの頭に衝突して、二人とも尻餅をついてしまった。

「いたあっ!!」

「あででで…」

「はははは」

そろって頭をさする二人を、クロノアは笑いながら見た。

第2話・聖地ラ・ラクーシャ　〜巫女の地〜（前書き）

大巫女様のいる、あの場所は大聖堂でいいのでしょうか…少し不安です。

第2話：聖地ラ・ラクーシャ ～巫女の地～

クロノアは、バグジの庵を出て鐘の見える方向へと向かう。鐘のある山の頂上へと続く道は、巫女達が住んでいるのか家が沢山建っていた。綺麗な花も咲いている。ロロが言うには、ここは“聖地ラ・ラクーシャ”と呼ばれているらしい。

『ここを道沿いに行けば、大巫女様のいらっしゃる大聖堂に辿り着きます。その上に、鐘があるんですよ』

道を進みながら、ロロはクロノアにそう教えてくれた。

しばらく進むと三丁四本に分岐している滝があり、その滝を右手に見ながら進むと、大きな洞窟の入り口が見えてきた。

「ここに、入るのかい？」

『ええ。ここも一本道なので、迷う事は無いと思います』

ポプカは珍しく会話に割って入ってこない。クロノアはロロの言うとおり、洞窟に入った。

「うわぁ……」

その洞窟は、息を呑むほどの美しさだった。キノコやキノコの菌糸が洞窟のいたるところにあり、キノコの胞子がキラキラと輝いて暗い洞窟の中を明るくしてくれている。さらに道端には石像が置いてあり、それもほんのりと青く輝いていた。

クロノアは苔むした道を進み、洞窟の外へ出る。するとそこは川の真上で、遠くに鐘と、大きな銅像が見えた。そして道はというと、橋のような建造物は途中で段になって壊れている。どうやらジャンプして飛び降りなければ先へと進めないようだった。

「……よし」

クロノアは意を決して飛び降りる。(クロノアにしては)さほど高くなかったようで、すんなりと着地する事ができた。しかし。

パシャン！

「うわつとぉー！」

水の中から、泪の海で襲われそうになったサメのような幻獣がジャンプし、まだ水面からはとても高いはずなのにクロノアが通って

いる橋のようなものを通り越した。

「あ、あぶなかつたあ……………」

『今度からはきをつけなきゃな』

ポプカがクロノアに注意を促す。クロノアはそれに頷いて、やつと下に辿り着くとまた洞窟へと入った。

洞窟の中は、先の洞窟と同じ感じだった。ただ、生えているキノコが少し違う。

しばらく進んでいくと、洞窟の壁にぽっかりと穴が開いていた。

「なんだろ、これ……………」

クロノアが覗き込もうとすると、ロロが静止を促す。

『ちょっと、そののムウを見ていてください』

クロノアは言われたとおり、現れて今はテクテクとこちらに歩いてくるムウを見た。クロノアの脇を通り過ぎ、穴の目の前を通過しようとした、まさにその時。

パクッ

穴の中から大きな幻獣が飛び出し、口のまわりにある大きな葉っぱのようなものその奥にある口を開いて、ムウを一口で食べてしまったのだ。

「！！　な、なるほど……」

クロノアはまたテクテクと歩いてきたムウを風だまで捕まえて、それを身代わりとして先へと進んだ。

外へと出ると、ロロが急にクロノアに話しかけた。

『ちょっと待って下さい』

クロノアは急停止する。ロロはリングから出てきて、道端に座り手を組んで祈り始めた。ポプカもその後に出てくる。

クロノアは上を見る。すると、泪の海で見たような銅像が建っていた。

「あっ、さっきもあったよね、これ」

「いや、これは今のクレア母神像」

ポプカがクロノアにそう教える。クロノアは首を捻った。

「へ？　じゃ、さっきのは…？」

「ありや、ふるきクレア像っていつてな、むかーし、悪い心をぬぎすてた時、その場に残された姿なんだそーな」

「ふーん…」

クロノアは頷き、クレア母神像を見つめた。

「さ、行きましよう」

ロロは祈り終わったようで、クロノア達にそう言い立ち上がった。

「うん、そーだね」

クロノアはクレア母神像の周りの道を上がっていき、また洞窟へと入る。そこを抜けると、巨大な時計のようなものがあった。

「あ、なんだろ、これ…」

クロノアが試しに先に進もうとすると、巨大な石が邪魔して進めない。クロノアは試しに巨大な針にムウを当ててみた。すると、巨大な針は石に当たり、石は砕け散る。

『おー、うまいコトやったなあ』

ポプカの素直な感嘆の声が聞こえる。クロノアは少し得意そうに鼻を擦ると、その勢いで二つ目の石も砕き、大巫女様のいるという大聖堂に入ってしまった。

建物の中は広く、大きな窓に石柱、その脇には翼の生えたツボが置いてある。カーペットの上を進むと、目の前に大巫女様が座っている椅子があり、その後ろには薄い幕で隠されているが、どうやらクレア母神像のような銅像が置かれているようだった。

「あ、あの、大巫女様……」

ロロが口を開く。大巫女様はしばらくロロ達の話に耳を傾けてい

た。

「……それではロロ、本当に世界を救いたいと願うのですね？」

大巫女様の問いに、ロロはしっかりと頷いた。

「は、はい！」

大巫女様は目をうすく瞑り、息を細く吐き首をわずかに横に振る。

「……つらく、けわしい道となりますよ」

「覚悟はできてます！」

と、ロロはしっかりと大巫女様を見て言い、そして

「……あ……ためしの鐘も……鳴らしました……」

今度は躊躇いがちに、そう言った。

大巫女様は声を出して息を吐き、そしてロロを見つめる。

「……わかりました」

そう言っつて、椅子から立ち上がる。そして手にしていた杖をかざすと、その杖の先についていた宝石から光が飛び、ロロの帽子に緑色の羽のような葉っぱのような“巫女の証”をつけた。

「ロロ、あなたを巫女と認めましょう。今後とも、世界のためにいっつそうのはげみを期待しています」

ロロは嬉しそうに顔を輝かせると、手を組んで頭を下げた。

「……あ、ありがとうございます！」

「よかったね、ロロ」

それを横で見ていたクロノアは、ロロに話しかけた。

「はいつ。本当に…本当に……」

ロロは涙ぐみながらクロノアのほうを向く。ロロは本当に嬉しそうだ。

「あなたたちには、これから四つのく世界を支える鐘くをまわってもらいます」

大巫女様は椅子に腰掛けると、語りだした。

「各地に奉られた四つの鐘の元をおとずれ、そこから“鐘の力”を集めてきてほしいのです」

大巫女様がそう言うと同時に、後ろの薄い幕にうつすらと映像が浮かび上がってきた。どうやら四つの鐘のようだった。

「力を集める……」

クロノアが呟く。巫女はさらに続ける。

「鐘の持つ調和の力で、悪しきわざわいを封じ込めるのです。できますか、ロロ？」

ロロはしっかりと大巫女様を見つめる。胸の前では、手を組んで

いる。

「は…はい！ がんばります！」

「…」

大巫女様は、ただ頷いた。

「それではさっそく、そのく<安らぎの鐘>からまわりなさい」

「はい！ で、では失礼します」

ロロはそう言ってお辞儀をすると、踵を返して出入口へと向かった。ポプカもそれに続く。クロノアもそうしようとした時、大巫女様がクロノアを呼び止めた。

「クロノアさん」

それは、とても優しい声だった。クロノアは振り向く。

「優しい子なのですね…ありがとうございます。ロロのことを、おねがいしま

す
」

クロナアは、ただ頷いた。

第三話：クレア・モ八寺院 へ鋼殻奇獣フォルガランへ

ロロとポプカは、寺院の脇にある階段を使い、屋上まで登った。クロノアは遅れてついていく。

「クロノアさん、早く早くー！」

巫女になったのが嬉しいのが、ロロはいつも以上に元気に手を振っていた。

クロノアは頷くと、ロロの待つ鐘の所へ行こうと、走り出す。

ぶうううううううん……

クロノアが走り出してすぐ、クロノア達の上空で、飛行機が飛ぶ音がした。クロノアは立ち止まり、見上げる。飛行機はクロノアの斜め上あたりで止まり、滞空した。

するとクロノアの背後……先程登った階段があるちよつとした円形のスペース……に、煙幕がかかっていた。その煙が上の方だけ晴れると、そこには見たこともない形の、金属でできた幻獣が居た。その幻獣の鼻息は荒く、手のようなものが身体から三対生えていて、それぞれに目のようなマークがついている。どうやら体の上に生えているのは頭のように、虚空となっている瞳には光は宿っていない。

「幻獣……？ レオリナか？」

ポプカがクロノアの隣に立ち、幻獣を見上げる。

「レオリナ？」

ポプカが言った名前に、クロノアは首を傾げる。

「ドロボウです。宝めあてに世界を荒す悪い人！」

ロロもクロノアの隣に立ち、クロノアにレオリナについて説明した。

「あたしら、ドロボーだってさー」

不意に、幻獣のほうからかわいらしい、悪く言えば猫なで声のよ
うな声が、クロノア達の耳に飛び込んできた。

煙幕は完全に晴れ、幻獣の足元 幻獣には足なんてなく、浮遊
していたが に、一人と一匹が立っていた。（一匹のほうも、幻
獣と同じく足はなく、浮遊していた）

「遠吠えだ。言わせとくさ」

厳しい、硬いイメージを持つ声が、一人の方から発せられる。

「ク・ウ・ゾ・ク！」

一匹の方は、先程の口口の発言を正す。

「あたしらは、空賊のレオリナ様とタットちゃんだ！ おぼえとけ
ー！」

どうやら、一人の方がレオリナで、一匹の方がタットというらしい。タットは言い終えるとあっかんべーをするように白い右手を目の下へもっていった。

「おまえが黒き旅人様か。……なるほどな」

レオリナはタットを気にも留めず、クロノアを見下す。そしてクロノアのほうへ手を差し出した。

「まあいい。とりあえずリングを渡してもらおうか」

なんだろうと見上げていたクロノアは、リングを渡せという要求に驚いた。

「リング!！」

「このリングは渡しません！」

めずらしく、ロロがクロノアよりも前に立ち、庇うように片手をクロノアの前にもちあげる。

レオリナは肩を竦めるが、諦める素振りはない。

「ま、そうだろうね」

そして踵を返して隅の方へ歩いていくと、幻獣へ一言、放った。

「やりな」

幻獣はまるで機関車のあげる汽笛のような吠え声をあげ、クロノアに向かって襲い掛かった!

「クッ」

クロノアは幻獣　いや、鋼殻奇獣フォルガランと間合いをとると、攻撃の隙を窺う。口口とポプ力はすでにリングへと入っていた。

『クロノアさん！　ムウを！』

丁度良く、クロノアの傍にムウが現れた。クロノアはムウを風だまで膨らませると、フォルガランの弱点をさぐる。まずは手、頭、そして胴体のような部分へとムウを当てていくが、フォルガランの体力に変化は無い。クロノアの攻撃が失敗すると、フォルガランは笑うかのように顎をガシャガシャといわせ、口から棘つきの鉄球をはきだした。

「くそ、攻撃がきかない……どうすれば……ん？」

クロノアがまたムウを撃って膨らませるためにフォルガランの後ろへ回り込んだとき、普通の動物だとお尻にあたる部分がオレンジ色に発光しているのが見えた。しかも、そこだけ金属に守られていない。不意に、違う次元で戦った幻獣のことが思い浮かんだ。

（ロンゴランゴちゃん！　お尻には十分きをつけるんですよ！）
そう、クロノアの記憶が正しければ、あの幻獣はお尻が弱点だったのではなかっただろうか。

「ここか！」

クロノアはすかさずその部分にムウを投げつけ、当てた。すると始めてフォルガランが苦痛の声をあげ、衝撃で一瞬身体がばらばらになったのだ！ どうやらダメージを受けているようで、しばらくばらばらになった身体をつまくつなげようと、高速回転を繰り返した。

クロノアはフォルガランの速度が緩まった時を狙って、ムウを当てる。それを三回ほど繰り返した時、突如フォルガランの身体が赤く火照り、今まで身体にくっついていただけだった三つの手が、クロノアにぶつけようとするかのように地面スレスレを飛び始めた。しかし、フォルガランの身体からは一定距離を保っている。

「あ！」

クロノアは、フォルガランの手のせいで地面を歩くムウ達が、無残にも殺されてしまったのを見た。ムウが居なければ、クロノアはフォルガランに攻撃することもできない。

「どうすれば……」

フォルガランの手を、ジャンプして避けるクロノアの眉間に、皺がよった。

『クロノアさん！ 上を！』

不意に、ロロがリングの中から叫んだ。クロノアは手の攻撃が襲来する前に、急いで上を見上げる。すると、ムウに翼の生えた形の幻獣：パタムウがそこには居るではないか！

「ありがとう、ロロ！」

クロノアはすかさずパタムウを膨らませると、手を交わしながらフォルガランの背後へと近づき、お尻目掛けてパタムウを投げつけた。それをもう一度やると、フォルガランもさすがに体力の限界が近いのか、先程より身体を真っ赤に火照らせ、鼻息も荒く、クロノアに迫ってきた！

クロノアは激しいフォルガランの攻撃を避け、パタムウを膨らませると背後へ回ってすかさずムウを投げた。

バシィッ！

その瞬間、フォルガランの身体は眩しく発光し、勢い良く爆発した。もう身体の一部も残っていない。クロノアは安堵のため息をついた。

隅で見ていたタットとレオリナが、残念そうに肩を少し落とす。

「ありゃー」

「ふーん」

レオリナはどうやら何かを考えているようだ。そして唐突に、クロノアへと話しかけた。

「おまえ、名は？」

「クロノア！」

クロノアは間髪入れずに答える。

「へへ、ちょっとカッコいいじゃん」

何を思ったか、タットはそう感想をもらした。

「クロノアね…覚えとくよ」

そんな相棒は無視して、レオリナはそう言い、そこから飛び降り

た。タットも後に続く。そして、どこに隠してあったのか、飛行機に乗り込んで飛び去っていった。

クロノアは、ゴマ粒ほどにしか見えなくなるまで、飛行機を目で追う。

「空賊…レオリナ…」

そしてぼつりと、何かを考えるように呟いた。

『そっぴゃー、よくあの幻獣の弱点が尻だってわかったな、クロノア？』

ポプカに話しかけられ、クロノアはリングを見る。

「ああ、うん。ロンゴランゴを倒した時を思い出したんだ。たしかジョーカーがお尻が弱点だって言ってたのさ」

『……ロンゴランゴ？ ジョーカーってナンだ？』

言ってしまった初めて、クロノアはルーナティアと“あの”世界は別物だった事を思い出した。

「あ、ごめんごめん。ずいぶん前、同じ様な敵を倒したことがあるって言いたかったただだから、気にしないで」

『ふーん』

ポプカは随分不満そうだったが、今は鐘の力を得ることの方が最優先だったので、それ以上追求はしなかった。

「<安らぎの鐘>か」

クロノアは、<安らぎの鐘>の前に立っていた。見上げると、とても高い。クロノアは鐘の傍に行き、数段しかない階段を登った。そこには、鐘の紋章のようなものが宙に浮かんでいる。

『クロノアさん、お力を』

ロロがクロノアに話しかけた。

「これをつてばいいんだね」

クロノアはリングの先にあるエメラルド色の宝石を向けた。そして軽く、力を込める。体が、勢いに押されて軽く後ろへ揺れた。

シャンリーン、シャンリーン、シャンリーン……

鐘が左右にゆれ、音が聖地ラ・ラクーシャじゅうに響き渡った。口とポプカはその音を聞くためにリングの外へ出てくる。そして、鐘からなにか緑色の光ったモノが落ちてきた。クロノアはそれを片手で受け止める。

「これが…鐘の力？」

三人で、クロノアの手の中でもいまだ発光しているモノを見つめる。

「オイラたちは簡単に、“エレメント”って呼んでるけどね」

「キレイだ…」

クロノアは素直な感想を漏らす。その光をじっと見つめていると、突如、クロノアの頭の中に声が響いた。

助けて……

「え!？」

クロノアが気がつくと、辺りは一面の暗闇になっていて、両隣にいたはずのポプカもロロも居らず、手の中にはエレメントも無かった。

助けて……助けて……

“夢の声”は、さらに響く。

「誰?」

クロノアは左右を振り返ったが、誰も居ない。

助け……

「どっ? どっにいるんだ!」

しかし、クロノアの呼びかけもむなしく、“夢の声”はだんだん擦れていき、聞こえなくなつた。

はっ

クロノアが気がつくところにはまた鐘の前で、自分の手の中にはエレメントがあつて、両隣にはロロもポプカもいて、ちゃんと自分の足で立っていた。

「クロノアさん……？」

ロロが心配そうにクロノアの顔を窺うが、クロノアはじつと、エレメントを見つめていた。その光が、程なくして消えうせるまで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5807d/>

風のクロノア2 ~世界が望んだ忘れ物~

2010年10月11日19時48分発行